

# 新川通信

第15号

題字：佐藤 大作

令和4年4月18日発行

## 巻頭言

### 新川開削200年にかける思い

越後新川まちおこしの会会長 山中 清蔵

#### はじめに

2019年12月からの新型コロナウイルスが2022年2月末になっても、パンデミックは収まっていません。コロナ禍で、人類には4つの危機に直面しています。

- 1) ふれあいの欠如                      2) 言葉の限界  
3) 罰のエスカレーション      4) 孤食の落とし穴

この危機の中で、越後新川まちおこしの会は、一つの報告と、継続中の事業の報告をします。

#### 1) 新川音楽祭開催される

令和3年11月13日(土)内野まちづくりセンター3階ホールにて開催されました。古俣慎吾さんを中心にスタッフ26名、出演者148名、観客59名。合計233名で、コロナ対策を万全にし、一人の感染者も出さず、画期的な音楽祭であったと自負しています。

#### 2) 文芸の故郷回廊紀行

令和3年8月23日新潟市西区自治協議会より「文芸の故郷ガイドブックの作成と地域の誇りと愛着の醸成」と題する事業が採択されました。

中山真さん中心に作成委員会を経て11月7日にガイドブックが発行されました。後に、令和4年1月30日、藤沢周氏が大熊孝氏と対談の際に、素晴らしいガイドブックと激賞されました。それから、内野・五十嵐まちづくり協議会、文化スポーツ部の推奨により、『文芸の故郷』まち歩きと出前講座を中山さんの孤軍奮闘が続いております。第3弾として、『文芸の故郷回廊紀行』の提案が始まっております。これは3つの協議会の共催で、西蒲区も含め、今までなかった広域な回廊紀行となります。この壮大な事業計画が、地域再生計画に進むことを究極な目標としての第一歩となる事を切に願って、応援してまいります。

#### 3) 越後平野に川(放水路)を拓く

新川開削200年記念行事として、「越後の放水路群から川の歴史を通し、水の恵みと災害について考える」の、6回連続講座を行うものです。

これは世話人の加藤功さんの尽力で、企画交渉を重ねて、第1回は1月30日、大熊孝先生の講演、藤沢周氏と対談が行われ、第2回目は2月6日、『落堀川開削から300年と松ヶ崎掘割と新潟』を新潟市歴史博物館学芸員の安宅俊介様の講演がありました。

第3回目は3月6日、山岸俊男さんより「新川開削から200年、200年後の人に引き継ぐ『新川』がいずれもYouTubeでのライブ配信で行われました。

#### おわりに

大熊孝先生の『洪水と水害をとらえなおす』の著書の中に、1820年の日本におけるGDP(国内総生産)は、当時のアメリカより日本の方が、1.75倍経済力が高かったとあります。これによって、幕末の日本がかなり豊かであった事に驚きました。

越後新川まちおこしの会は、今後の200年を見据えて、新潟市を初めとして、県、国の他、関係各位のご指導、ご鞭撻を仰ぎながら、会の継続、発展を目指して、邁進してまいります。

会の設立の経緯の中で、一つだけ達成されていない物があります。それは、新川掘割記念館を地元で作る会の発足です。私は、多様性を持った記念館にすべきと考えます。越後平野に川(放水路)を拓き、20河川をもたらした経緯を一堂に表した展示。文芸の故郷に関与した方々の発表展示。そして、必ずやって来る5m以上の津波に備えた建造物にすべきと考えます。これが、地方再生の最有力な計画と考えております。

ご協力の程、よろしくお願い致します。

# 当会が令和3年度河川功労者表彰を受賞しました

山岸 俊男

## 1. 河川功労者表彰とは、

公益社団法人日本河川協会は、昭和15年に全国的な大水害が頻発する悲惨な状況の中で、水害を防除するためには河川に関する国民の認識を深め、官民の一致協力が必要であるとの見地から、全国の都道府県の要請と支援を受けて設立されました。

その後の活動は、幅広く多様な分野にわたっており、河川功労者表彰は、河川分野における表彰制度として昭和24年に始まり、以来、治水・利水・環境の観点のもとより、歴史・文化、河川愛護、国際貢献、学術研究、地域振興等の観点から広く社会に対し功績のあった個人や団体を毎年表彰しています。

この度、当会が設立当初から新川、西川、広通川沿いの清掃活動を毎年2回（春、秋）行っており、10年以上継続していること、日頃、新川の歴史等の伝承活動や地域間交流に努めていること、新川開削200年を迎え川と川の交差する貴重な土木遺産とその魅力を後世に伝える河川文化の発展に貢献していることから、新潟市西区地域課が、(公益)日本河川協会へ推薦していただいた結果、団体の部にて受賞することができました。これは、会員皆様のご協力、ご支援のおかげであり、厚く感謝を申し上げます。

## 2. 表彰式について

表彰式は、令和3年6月1日に(公益)日本河川協会において行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止の事態となりました。

そのため、表彰式は、令和3年6月9日（水）11時～内野まちづくりセンターにて、西区地域課杉山係長から山中清蔵会長へ表彰状と記念品（対のぐい呑み）が渡されました。詳細は7月4日の西区報に掲載されました。



受賞した表彰状

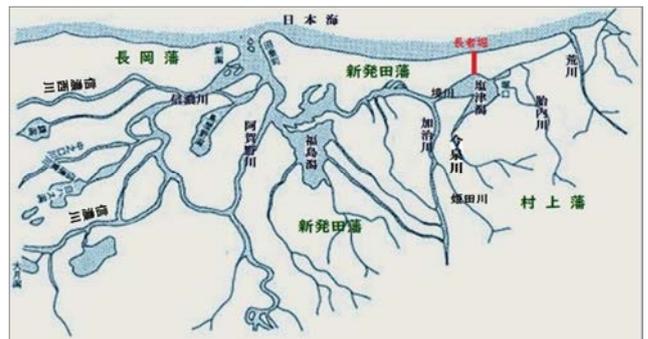
表彰を受ける山中清蔵会長

その後10月になって、日本河川協会から「令和3年河川功労者紹介」の投稿依頼が当会へあり、新川を全国へ知らせる良い機会と捉え受けることになりました。その表題は『越後の「新川」誕生からこれまで』と題（5P）したものをここに要約して報告します。

## 3. 『越後の「新川」誕生からこれまで』の概要

### 1) 江戸時代の越後

江戸時代の越後の地域は、新発田藩の絵図（正保2（1645）年）によると、信濃川が長岡市付近にて分派して信濃西川（現：西川）、信濃東川（現：信濃川）、その中央を中之口川が流れ、この3河川は現新潟市に入ると再び合流し、河口部で更に阿賀野川が合流して日本海へ注いでいた。



享保2（1717）年 越後国絵図 出典：新潟市史

これは信濃川が長野県から新潟県に入ると津南町、十日町市に日本一の河岸段丘を形成しながら山間を抜け、長岡市付近の平地に至り扇状地形から氾濫河原を形成した。信濃川は、洪水のたびに流路を変え越後平野に大量の土砂を堆積した。また、分派した3河川が再び新潟市付近にて合流したのは、7,000年前頃から亀田付近に新砂丘Ⅰが発達、3,000年前頃には鳥屋野潟付近まで新砂丘Ⅱが前進する中で行く手を阻まれ合流したと推定される。

1,700年前頃に、新砂丘Ⅲが進展すると信濃川の河口を北上させた。一方、北の荒川との間に位置していた阿賀野川は、新砂丘Ⅲの急激な進展により出口を阻まれ南下して信濃川の河口付近で合流することになったと推定される。

その結果、大河信濃川と阿賀野川が合流したため、その流量は多く、水深も深く12尺（3.6m）、北前船は、川岸に直接寄港できることから川湊として新潟湊は大いに栄えていた。

越後絵図に見られるように日本海に注ぐ河川は、北の荒川から弥彦山角田までの70 km間は、大きな砂丘に阻まれ、海へ出る河川は信濃川と荒川だけで、越後山脈から流れ来る数々の河川は全て荒川と信濃川に合流して海へ出ている。そのため内陸部は洪水が頻発、低湿地帯と数多くの湖沼を形成していた。

享保7(1722)年に幕府は、財政確立のため町民請負による新田開発を全国的に奨励した。越後では、信州出身の竹前小八郎らが越後最大の塩津潟(紫雲寺潟)の干拓を私費2,000両で実施する計画書を幕府へ提出した。

享保13年(1728)年、堀割り工事が開始された。工事は潟の水を直接海に落とす堀割り工事と加治川に分派が塩津潟に流れ込むのを防ぐ締切り工事であった。これは、加治川に分派を締め切ると全ての流量が加治川に流れるため、新発田藩と沿川の住民から洪水の危険性が増すため、大反対で工事が難航した。

竹前小八郎はこうした問題解決の心労が重なり、享保14年に突然亡くなった。その後を兄の権兵衛が引き継ぐこととなったが、幕府が残工事の完成を危ぶみ干拓地すべてを没収し、幕府(新発田藩)が行うことになった。

新発田藩は加治川沿いの洪水対策として、阿賀野川の堤防天端の一部を切り落とし洪水時の水だけ流す堰(越流堤)と海までの堀割り工事を提案し、新潟町の許可を得ようとしたが、新潟町は、もし阿賀野川が直接海へ流れ込むようになると河口の信濃川流量が半減して、湊は北前船が接岸できなくなるのを恐れて大反対であった。

新発田藩は、新潟湊の関係者と協議、堀割り河口には湊を設けないこと、減水した場合は復旧することを条件に同意を得て、享保15(1730)年に着手、完成したが、翌春の融雪出水で越流堤は破壊され本流と化してしまった。



水量の増えた時流す堰



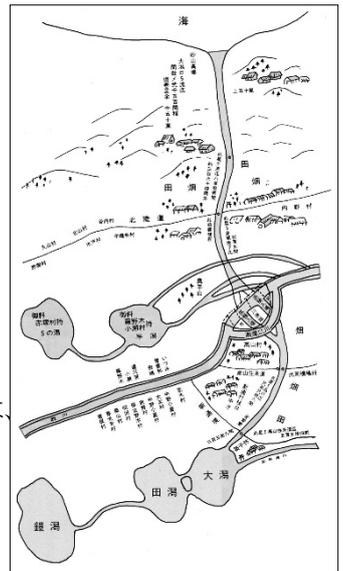
翌年の雪解け水で壊れた堰

その結果、信濃川河口の水量が半減し湊は北前船が接岸できず、新潟町は新発田藩に復旧を迫ったが、当時の土木技術からして本流を元に戻すことはできなかった。

阿賀野川の水位が下がったので、潟は干上がり周辺の村々は水害から救われた。また干拓を検分の結果、1,930町歩と定め、500町歩が権兵衛に与えられたが投資した金額に見合うものではなかった。

## 2) 新川開削

江戸時代の越後、西蒲原一帯は、信濃西川(西川)と中ノ口川に挟まれ、多くの湖沼が点在する低湿地帯であった。その為、豪雨のたびに排水不能となり一面が湛水(悪水)して幾日も続き飢饉が繰り返されていた。先人はこの窮状を打開するため悪水を日本海へ放流することに希望を託し、元文2(1737)年から約80年間に渡って9回もの請願を繰り返したが、新潟町が阿賀野川の例を恐れて反対したため、幕府は許可しなかった。



三潟悪水抜き絵図(吉田ツタ氏所蔵)  
出典: 図解「こいがた歴史散歩 新潟」

文化年間に入り洪水被害が頻発するに及んで、長岡藩、村上藩所領の西蒲原52カ村が団結(代表:伊藤五郎左衛門)し、文化11(1814)年、新潟町を説得し、長岡藩を通じて幕府へ堀割りの願いを提出した。そして、苦難の末、文政3(1820)年に二門が完成した。その後さらに排水効果を上げるため三門が増設され、計五門となった。(以下省略)

人は生まれる場所を選ぶことができない。多くの人はその地で生まれ、育ち、亡くなる。記憶は、生きる糧であり、これを未来の子供たちに継承することが、当会の務めでもある。

# 「文芸の故郷」まちおこしのための取組について

中山 真

## 1 はじめに

令和2年度が200年の記念の年でしたが、コロナ禍により様々な記念行事が中止の憂き目を見ることになりました。

コロナ禍が一段落しつつある令和3年度は、新川開削後の201年目となり、新たな出発の年となりました。そこで、海と蒲原の低地を壁のように隔てていた金蔵坂の掘割により五十嵐浜の地域と内野の地域が一体となり、新たな風土が作られたことに着目して、「文芸の故郷」構想を提案しました。

## 2 「文芸の故郷」構想のあゆみ

### ① 新川通信 第14号

令和3年4月25日発行の「新川通信」第14号の巻頭言に4ページ仕立てで「文芸の故郷」構想が掲載されました。表題と章立ては次のようになっています。

新川開削が祖となる「文芸の故郷」  
街づくり創出事業構想について

#### ・新川開削後のあゆみ

- ・新川開削が私たちに付与した恩寵
- ・有為な人材を輩出する風土
- ・「文芸の故郷」構想
- ・「文芸の故郷」街づくり創出事業（案）
- ・地域再生制度を活用

### ② 越後新川まちおこしの会総会に続く講演会

令和3年4月25日、西地区公民館において越後新川まちおこしの会総会が開催され、それに続く講演会で、次の表題と章立てで講演を行いました。

文芸の故郷街づくり創出構想  
—地域再生法に基づく地方創生関係交付金を活用して—

- ・三日月橋を中心に見た内野・五十嵐地区
- ・街づくりの視点
- ・「文芸の故郷」街づくり創出事業（案）
- ・街づくりの再構築に向けて

なお、この講演はYouTubeで配信されています。

### ③ 区政懇談会における西区役所からの回答

令和3年5月20日に開催された内野・五十嵐まちづくり協議会区政懇談会において、西区役所様から、次のような文書回答をいただきました。テーマとその一部を掲載します。

地域再生法に基づく地方創生関係交付金を  
活用したまちづくりの新潟市による  
地域再生計画の策定について

「前略・・・今回、内野地域の活性化についてお話をいただきました。地域の活性化を考え、ご提案いただきますことに感謝しており、現在、地域でお考えになっておられる内容をお聞かせいただくことをお願いいたします。

新たな取り組みでの交付金活用はハードルが高いと考えていますが、お聞かせいただきました上で、まずは地域の総意として取り組むことが前提であり、区と地域の役割分担のもと出来るものから始め、取り組みが進展してきた時点で皆様と交付金の活用を相談したいと考えています。」

### ④ 西区役所地域課へのプレゼンテーション

前述の区政懇談会において西区役所様の回答をいただいたので、令和3年6月2日、対応の窓口となる地域課様を訪問し、提案の説明をしてきました。内容は、越後新川まちおこしの会総会における講演内容とはほぼ同様の内容です。その際、新潟市が策定している「第2期 新潟市 まち・ひと・しごと創生総合戦略(2020—2024)」とテーマ・方向が合致していることを確認しました。それは、次のキーワードで表されています。

・新潟への誇りと愛着 ・将来にわたって活力ある  
住みよいまち ・暮らしたいまち新潟 ・魅力を高  
め、ひとが集う ・来訪者へのおもてなし 等

地域課様からは、地域活動補助事業等を活用して具体的な事業を先行的に実施すること、若い世代の意見を取り入れるなどして世代間を跨ぐ総意となることなど示唆に富んだアドバイスをいただきました。

⑤ 自治協議会への事業提案

令和3年7月26日、西区自治協議会様が主催する「地域課題解決に向けた提案事業」に応募しました。8月17日に自治協議会の該当部会の皆様に対してプレゼンテーションを行い、8月27日に決定通知を受け、令和3年9月7日から令和4年2月28日の間に実施することになりました。企画の概要は以下に記します。

事業名	文芸の故郷ガイドブックの作成と地域への誇りと愛着の醸成
目的	文芸の人を多く輩出する地域の紹介という視点から内野・五十嵐地区を紹介するガイドブックを作成し、内野・五十嵐地区の新たな魅力を探るとともに、新たなまちおこしのきっかけとする。
主な内容	(1) 文芸の故郷巡礼ガイドブックの作成(新たな価値の自覚) (2) ガイドブックをもとに、小中学校のPTAを対象にした『親が子に語る内野の新たな魅力と誇り』講演会の開催(子育て世代の地域への誇りと愛着の自覚) (3) 地域の小中高等学校へのガイドブックの寄贈(各学校の総合的な学習の時間での活用を期して)

⑥ 地域活動補助事業

内野・五十嵐まちづくり協議会文化・スポーツ部の主催事業に位置付けていただき、内野・五十嵐地区の事業として11月5日から立ち上げたことに意義がありました。

企画の概要について以下に記します。

事業	『文芸の故郷』まち歩きと出前講座
目的	新たな視点で街の魅力を探り、住民及び将来のまちづくりの主体となる子供たちが地域の良さを改めて学び、そこに生まれ育つことに感謝の気持ちを持ち、新たなまちづくりの方向性を探るとともに、誇りと愛着を持って将来を担えるような気構えを子供たちに育成する。
	内野まちづくりセンターをホームベースにして、内野の商店街を中心とした街並みを『文芸の故郷』という新たな視点でまち歩きをします。

主な内容	<p>地域住民の皆様からは、新たな視点でのまち歩きによって、内野・五十嵐地区の素晴らしさを再確認してもらい、今後の新たなまちづくりはどのようにしたらよいのか考えてもらいます。また、全県や全国に発信することで、文芸に関心を持っている人たちを中心に多くの人々に内野・五十嵐地区を訪れてもらい、商店街発展の足掛かりにします。</p> <p>地域の小・中・高等学校に出向き、『文芸の故郷』に関する出前講座を行います。この出前講座を通して、子供たちにとってのこの地域の先輩が文芸関係にいかにも多く輩出され、多方面に活躍しているのかを再認識して、この地域に対する誇りと愛着を育て、将来のまちづくりの基礎とします。</p>
------	--

3 成果と課題

「文芸の故郷巡礼紀行」と銘打ったガイドブックを作成し、それに沿ったまち歩きの実施や小中高等学校への寄贈、出前講座等の実施により、地域の皆様からはこの地が文芸に関する人を多く輩出している地域であることの認識をしてもらいました。そのことにより、地域への愛着と誇りをより強く抱いてもらったと思っています。

コロナ禍により、顔を合わせての集会等が制限されたり、年度途中の事業であることから受け入れてもらえなかったりしたこともありました。年度当初あるいは前年度のうちに計画を共有することが大切であると痛感しています。

4 今後の動き

令和4年度は、事業の主体を広げていきたいと考えています。内野・五十嵐まちづくり協議会、コミュニティ佐潟、コミュニティ中野小屋の3つの協議会が共同で事業を実施し、事業範囲も西蒲区にまで広げていきたいと考えています。

この地域が新潟市にとって大きな役割を果たしていることを多くの人たちにアピールできるようにしたいと考えています。

# 『蒲原列島～放水路がつくる越後平野の「島」』

渡邊 宏海

## 「新潟島」

周囲を信濃川や関屋分水そして日本海に囲まれていて、まるで「島」のようになっている地域はそう呼ばれている。というのも、もともと新潟島西部の関屋地域とその西側の青山・平島(へいじま)方面とはほぼ陸続きとなっていて、そこに関屋分水路(放水路としてはこの名で記すこととする)という人工の川が昭和47(1972)年に通水したためだ。令和4(2022)年は、関屋分水ができて50周年となる。ということは、新潟島もまた50周年を迎えると言えるだろう。

この「新潟島」ができた経緯を踏まえて考えると、放水路(分水路)が開削されたことによってその放水路と自然河川、そして日本海に囲まれている陸地は「新潟島」同様に「島」と呼べるのではないだろうか。そう考えてみると、越後平野に現在18本ある放水路や信濃川・荒川といった河口の数に応じて「島々」があり、おおよそ蒲原地方の海岸線に沿う列島のように見えてくる。本稿はこういった「島」を見つけることによって、米どころ越後平野がどのように拓かれてきたかを把握する試みである。



関屋分水路と信濃川、日本海に囲まれた「新潟島」

なお、「島」を考えるにあたってその地域を分断する意図は無く、むしろ「島」となる以前は陸続きとなっていたことを捉え、放水路の対岸地区同士をグループとして捉えるための方法と考えて欲しいと思う。

はじめに、上記の条件以外にもいくつか留意点があるのでご一読願いたい。①本稿における越後平野の説明範囲は、北限を現村上市の荒川左岸、南限を現長岡市の落水川(島崎川)右岸まで。②陸地が放水路や河川に接する部分を「島」の輪郭とし、川同士が合流せず立体交差となっている箇所も「島」の輪郭とみなす。③以前の川の流れとみられる水路なども「島」の輪郭とする(例外あり)。④各々の「島」の名付け方として、その地区の主な町の地名や、「島」の範囲をある程度的確に表す旧自治体名、もしくは「島」を成立させるための放水路の名称やその地名などを採用する。

(注;○時代の中で流れが大きく変わった川において、放水路や派川となったものはそれぞれ個別のものとし、本川は現在の流路で作図してある。○作図において、島の輪郭をなざると元の川に戻ってくる場合(川の始点が内陸にある等)、その箇所を省略する。)

『放水路がつくった越後平野の「島」』の図からは、17もの「島」が南北に並び、日本海と本州の間で「浮かんでいる」ことが見えてくると思う。海におよそ垂直に入り込む輪郭は、信濃川と荒川を除き全て人が造ってきた放水路だ。そして海と並行する輪郭は現在の川の流れの他に、かつてそこで大きく流れていた川の流れを描いている。これを念頭に置いて、越後平野の放水路群の歴史を見ていこうと思う。



川(放水路)を切り拓いて出来た越後平野の「17島」

「正保 2 (1645) 年の越後平野」の図を見ると、信濃川と荒川のみが日本海へと流れていたことが語られている。この図において信濃川—荒川間の海岸沿いの広い陸地が「島」のように見えるが、越後平野で最も早く開削された長者堀（落堀川）が享保 6 (1721) 年であり、その約 80 年前の状況を示すこの「島」は自然の力で形成されたことになる。



正保 2 年の越後国略図

塩津潟（紫雲寺潟）の干拓を目指して掘られた長者堀によって、越後平野に初めての「島」が二つ現れた。しかしその 7 年後の享保 13 年に、加治川から塩津潟に流れ込んでいた境川が締め切られたため、西側の「島」が一度姿を消した。この時代には、「亀代島」の南側の流路をつくった享保 12 年の二ツ山開削や、「メ切島」の東側の流路となる享保 17 年の今泉川の加治川からの締切工事などが行われ、加治川周辺の環境が大きく変化していった。

次に「島」が生まれたのは、享保 15 (1730) 年の松ヶ崎堀割（阿賀野川）だった。その翌年の雪解け水による洪水などでこちらが本流となり、元の本流は舟運業としてそこを通っていた沼垂船統のために再び開削されることとなった。こうして安永 2 (1773) 年にできた通船川で「沼垂島」が生まれ、最古の「島」として残っている。通船川が通水するまでの約 40 年間は小阿賀野川までの、亀田郷をも包有する中蒲原の広い範囲が「島」だったと言える。



享保 16 年の雪解け水で阿賀野川が抜けてできた「沼垂島」

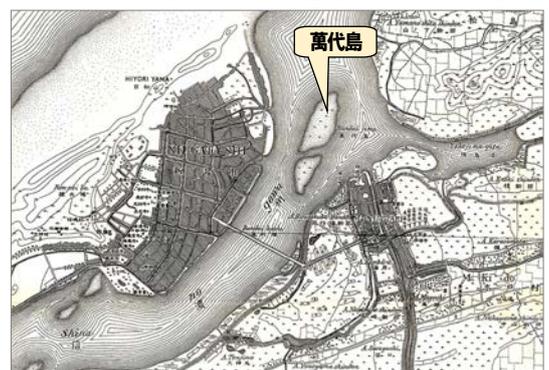
ここまで信濃川以東を見てきたが、次に信濃川左岸の西蒲原方面も見てみる。「正保 2 (1645) 年の越後平野」は信濃川以西に河口が無かったことを示しており、こちらでは文政 3 (1820) 年通水の新川が初めての放水路となる。新川によってできた「島」は、「新潟島」と「西新潟島」を合わせた範囲となっていた。

新川が西川と立体交差する理由は信濃川河口への水量確保の他に、西川が蒲原船道の舟運路となっていたからだ。西川を遡上すると旧分水町の地蔵堂に辿り着くが、かつてはその手前の牧ヶ花で出雲崎から流れ込んでいた島崎川へと入ることができた。後に大河津分水の工事に伴い、島崎川は西川から遮断された。しかしそれ以前の明治 6 (1873) 年に郷本川が完成した際には、新川から西川・島崎川を経て寺泊までも内包する広大な「島」となっていた。

大正 11 (1922) 年の大河津分水通水の頃には、物流の主役は鉄道になっており、島崎川流域は円上寺潟の干拓を目指していた。円上寺隧道は日本最古級のコンクリート製河川トンネルで、大正 4 年から 100 年間現役で地域の水害に役立ってきており、昨年令和 3 (2021) 年に土木学会の選奨土木遺産として登録されている。

近現代の技術力をもって、それ以降も川（放水路）は拓かれ続けた。紙面上の都合で、概略のみの解説となった。筆者自身も駆け足でこれらの放水路、治水の歴史を勉強してきたこともあり、不完全な所も多々あると思っている。

最後に、「島」を見つけていく中で思ったことを一つ。「新潟島」は今でこそ「島」と呼ばれているが、かつて河口周辺に出来た中州は島の名が付き、白山島や寄居島など現在の地名の由来となっているものが多い（万代島等は現在でも使用されている）。川幅の減少や堀の埋め立てなど、近現代を経て人々から水辺が離れいったことが「新潟島」という概念を生んだのかもしれない。



明治 22 年作成の迅速図の中の「新潟町と万代島」

# コロナ禍の「新川開削200年連続講座」

加藤 功

## 新型コロナで翻弄された2年

2年前の2月25日内野まちづくりセンター3階のホールで、新川開削200年記念行事の「十返舎一九とたどる『新川開削ものがたり』上映会」を行いました。しかし、参加者が会場定員の2倍近くもお出でになり、多くの方にそのまま帰っていただく事態となりました。急遽3月28日に再上映会を行う予定でしたが、西区の施設でコロナの集団感染者が出た事から延期となり、その後は全て自粛ムードとなりました。



ホールに入りきれないため廊下で鑑賞する多くの参加者

そんな中の昨年8月、NPO法人 信濃川大河津資料館友の会の樋口 勲さんより、2022年は大河津分水路100周年、関屋分水路50周年の記念に当たるので、一緒に何かやりませんかと声を掛けられました。お互いの情報を交換する中で、共通と原点となったのは「越後平野の地形と治水」であり、その点を改めて「見つめ直す講座」を開いてみてはどうかとなりました。

正保2(1645)年の越後国絵図では、越後平野の河川の出口は、岩船の荒川と新潟の信濃川のみでした。それは、角田浜から瀬波に至る延長70kmの砂丘が連なり、内陸の川の出口をふさぎ、砂丘内部に淡水性の大小の潟を無数に作り出していました。そのため、行き場のない悪水(湛水被害)で、越後平野は水害の常習地帯でした。その湛水の解消を図り、新田開発のため300年前の1721年、長者堀(現在の落堀川)を拓きました。

阿賀野川、新川、大河津分水路、関屋分水路など18本は、全てその後に掘られた川(人工の水路)です。



正保2年と現在の越後平野の河川比較図

## 6回の連続講座開催

当時はコロナの第5派が終わり、三蜜を避けながらお互いの生の声を聞ける状態にあったので、内野まちづくりセンターで講演となりました。信濃川河川事務所、信濃川下流河川事務所、新潟県、西蒲原土地改良区様の後援をいただき、『越後平野に川(放水路)を拓く』とし、300年前から現在に至る越後平野の治水史を、学びながら「川の恵みと災害について」一緒に考える、6回シリーズの連続講座としました。

第1回は基調講演として、数十年前にこの放水路群の成立過程から研究してきた、当会の顧問である大熊孝先生よりお話をさせていただき、事としました。また地元内野出身で、芥川賞作家の藤沢周様と大熊先生との特別対談をさせていただき、事としました。

2回目講座は、300年前の落堀川開削を取り上げ、第3回目に新川開削200年、第4回目は樋曾山隧道3本の150年、第5回目は今年100周年を迎える大河津分水路、最終回は今年50周年の関屋分水路としました。

## コロナ禍でも、YouTubeでライブ配信

今回の講座は、コロナ禍後の社会を想定し、コロナ感染者が出ても講演は無観客でも出来る様に、「会場とYouTubeでライブ配信」の2本立てとしました。

今年1月中旬からのコロナ第6波の急激な拡大により、新潟県でも「まん延防止等重点措置」が適用となり、会場も休館となり使用できなくなりました。

そのため、大熊先生にお願いして、みずぎ野の大熊河川研究所をお借りし、そこで1月から3月の3回YouTubeでのライブ配信をさせていただきました。

初めてのYouTubeでのライブ配信となりましたが、お陰様で再生回数は1回目732回、2回目411回、3回目368回、合計1,511回(2022年3月24日現在)と多くの視聴者に見ていただけました。



2022年1月30日 鎌倉の藤沢さんとZoomで特別対談

## 2019年12月1日新型コロナ感染症最初の患者

2年前に中国武漢で最初の新型コロナウイルス患者が出て、このウイルスは瞬く間に地球上の各国に広がって行きました。これにより、日本国内だけでなく全世界の様子がいっぺんで大きく変わりました。感染力が強く、かかると肺炎を起こし死に至る病であると、世界中にその脅威が広がりました。

あれからたった2年と4カ月です。

	感染者	死者数	致死率
世界	4億7738万2359人	610万9743人	1.3%
日本	629万5165人	2万7618人	0.4%
新潟県	3万9360人	87人	0.2%

2022年3月25日現在のコロナ感染者数、死者数、致死率

## 明治のコレラ感染状況

過去にもこれに似た病気によって人々の生活に大きな影響を与えた事例がありました。それはコレラです。漢字で「虎列刺」あるいは「虎列拉」と書きます。

感染源のほとんどは、コレラ菌に汚染された水や食べ物で、発病すると3日も経たずに死に至ることから「三日コロリ」ともいわれ、恐れられていました。

コレラ菌が原因で、激しい水様性下痢を引き起こすこの経口感染症がわが国に入ってきたのは19世紀です。文政、安政、文久の時代から明治、大正、昭和にかけて、幾度か流行を起こしています。

明治12年と19年の全国と新潟県の患者数を比較してみました。致死率は現在のコロナとは比較にならない数字で、6割の方が亡くなっていました。

年	国県	当時の人口	患者数	死者数	致死率
明治12 (1879)	全国	3646万人	16万2637人	10万5786人	65.0%
	新潟県	155万人	5229人	3360人	64.3%
明治19 (1886)	全国	3851万人	15万5923人	10万8405人	69.5%
	新潟県	163万人	9052人	5167人	57.1%

明治12年と明治19年のコロリ患者数、死者数、致死率

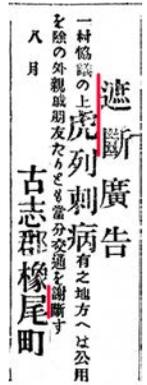
下記の表は明治19年9月2日の新潟新聞の記事ですが、右の8月30日患者発生427人に対し、当日の死者は423人と危機的状況であった様です。

新潟新聞 明治19年9月2日号の記事

新潟新聞 明治19年9月2日号の記事

今回のコロナ騒動では、都市封鎖をして感染を防ごうとしている国がありますが、日本でも同様な事がありました。

現在は合併して長岡市栃尾となりましたが、当時の椽尾町が出したもので「遮断」と町を封鎖していますが、最後に「謝断」と書くなど明治人の気質があふれていましたのでお知らせします。



新潟新聞の広告

## 私の身近にあった避病院

現在コロナ患者の重症者は、病院に入院して治療を行い、社会に復帰させる事をやっていますが、その基本が出来たのは明治12年の「虎列刺病避病院規則」が出来たことによります。

私の生まれは新潟の下町で、湊小学校に通っていました。学校から100mに北浜病院（避病院）がありました。当時の「避病院」は、コレラなどの感染症患者用だけではなく、主に結核の患者の方が多く入院しており親戚の叔母も居て、私も寄った記憶があります。

明治43年測量の地形図から「避病院」を探してみると現在の新潟市には47カ所があり、多くの市町村に「避病院」があったことを知りました。

## コレラ騒動と内野避病院

明治12年新潟市でもコレラ患者が発生しました。その対応を巡り、8月5日新潟下町で竹槍などを手にした人々が警察や富商を破壊する暴動が発生しました。駆けつけた警察によって鎮圧されますが、死者を出すに至りました。2日後沼垂でも暴動があり、避病院などが破壊されました。

明治42年、新川暗闇を作る際の「西川改良工事計画図」が手元にあります。内野町の外れに大きな建物が記載されています。何だろうと思っていましたが、昭和15年刊行の内野町勢要覽に載っていました。

内野町隔離病舎、「明治32~33年の頃赤痢病の発生あり、各部落に傳染病頻出し、大字五十嵐濱最も猛烈を極め、避病院の建設及び増築等をなしたるは此時なりき。当時一家全滅をなしたるもの数戸を出せり。」とありました。

今後もコロナが、第7波、8波とやってくるかも知れませんが、それでも連続講座は最後までライブ配信で行いますので、ご視聴ください。

# 被災地訪問 あれから10年

百崎 進

## 荒浜小学校

新潟を出て磐越道、東北道、今泉 IC で一般道に入り、最初に震災遺構となっている荒浜小学校に降り見学（視察）しました。海岸より約 700m の近さ。2 階まで津波が押し寄せたとのこと。

現在、校舎の周りは住居もなく、土台や少しの瓦礫を残されているものの、きれいに整地されておりました。ざっと周囲を見渡すと、とてもここで何があったかと想像もしかねるほどでした。10 年もの月日が過ぎ、この此処の地、荒浜小学校を震災遺構として残さないかぎり、風化されかねないと思えました。

校舎内は津波が去ったそのままの状態が残されていました。新聞、テレビなどの報道では“すごいなー、悲惨”であるとしか思わなかったのですが、その現場、その状況、状態を目のあたりにした時は“えっ！”と声も出ない驚きでした。

悲惨なというよりは、「嘘でしょう？」としか思えませんでした。あまりの状態。児童や教職員、住民など 320 人が避難救助されたとのこと。

## 南三陸町防災庁舎

テレビなどでよく目にしていたものの、やはり現場で実物を見たときは、声も出ませんでした。3 階建ての赤い鉄骨のみがむき出しにされた状態で遺構として立っている。屋上に避難したにもかかわらず、津波はその上を 2m も越えて行ったとは。今は脇を流れる八幡川は高く盛り土された堤防になっていました。

「祈りの丘」とし南三陸町震災復興記念公園は土盛りしてあります。また、その八幡川を越えると、そこには街を元気づけ、またここを訪れてくれた人に、“自分たちは元気で頑張っているよ”と。津波の恐ろしさ、津波の現実を見て欲しいとの思いでお店をやったり、語り部的な空間がもうけられていました。



南三陸町防災庁舎の現在

## いわて TSUNAMI (つなみ) メモリアル

「奇跡の一本松」で知られる陸前高田市の海岸線に、国のメモリアルとして、高田松原津波復興祈念公園内に「東日本大震災津波伝承館」が令和元年 9 月に開館しました。復興の象徴となる国営追悼・祈念施設です。また同施設内には道の駅「高田松原」が併設されています。

「歴史を知る」とありましたが、既にあの津波は「歴史」なのでしょうか？10 年前の大惨事。「10 年」という月日？・・・私にとっては「ついこの前の」「あの大津波、大惨事」としか思えないのです。

気仙沼市内の地震津波災害も尋常じゃない被害であったらう。沿岸部に石油タンクが倒壊し、漏れて、引火する火災が発生で、何も手が付けられなかったとのこと。

旧戸倉小学校、旧戸倉中学校、北上総合支所などの被害状況を見て回りました。



少しでも高くと・・・190 名全員助かった（戸倉の五十鈴神社）

最後に石巻市の大川小学校 私はこの小学校へは今回で 3 回目となるのですが、来るたびに残すのか、壊されるのか気にはなっていました。

今回の訪問で、遺構として残り、脇に震災伝承館が併設されたという事で、私自身は安堵しましたが、一部にはなぜ「津波」という文字が付かなかったのか？地震もさることながら、犠牲は津波による事があったのでは？

ニュース等で避難のやり方が「どうのこうの」の問題が耳に入っていたもので・・・確かにその問題は大きなことでしょう。しかしそれは結果であり、それを教訓として、伝え続ける・・・私も結論は出ません。想定外という言葉が有りますが想定という言葉が有っての想定外。難しい問題ですが、どこの線を想定とするか？・・・

訪問当日配布いただきました資料を参考させていただきました。

これまで多くの災害地を訪問させていただきました。とてもこの企画をたて、実行していただきました各位の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

おおくのことに気づかされました。

地震・津波 天災であります。如何に防災、減災してゆくかを私、私たちに問いかけてくれた東北視察の旅でした。ありがとうございました。

この旅で感じたことは、災害に、被災に会い減災とすること何か？津波に対しての対策としては、高い防潮堤を築く。どの位の高さなら？

また、被害が及ばない高い所への居住。避難での心がけと避難に対しての計画、避難訓練。「てんでこ」「てんでんこ」など。

### ——後世への伝承——

ともががんばりまっしょい！

もう一つ感じたことは、多くの被災地では、新しい環境、新しい生活、新しい空間、新しい関係が整いつつあります。つまり新しい社会、コミュニケーションを進め、安心安全で、住みよく楽しいコミュニティを作ってゆくか、行くことが今後の課題と思います。他の地へ避難された人も含め、新しい「人」としての営みを進めて行くことが大事だと思います。

私たち「越後新川まちおこしの会」が推し進めている活動の一環と同じことかと思えます。場所が変わっても人間の生きて行く、生活して行くことを常に追いつける。

今回は「地震、津波」で被災された場所、人たちの現実を見聞きしてきました。



気仙沼の五十鈴神社回廊で参加者全員の記念撮影

東日本大震災では「地震、津波、放射能」と言う3つの災害にあった福島「東京電力福島第一原子力発電所」近辺で被災地の人たちはどんな生活をしているのか？現地の復興の進み具合は何処まで行っているのか？・・・も気になりました。

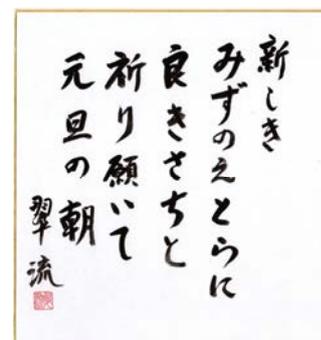
私の息子は福島県いわき市平に家族で生活しています。2011年3月13日隣町の楢葉町に住んでいる祖父母と共に、我が家新潟に避難してきました。しかし1週間ほどで「自分の家が一番いい」と言って帰りました。

しかし実家には帰れず、避難住宅に入居しました。やはり「自宅が良い、自宅に帰りたい」と言って・・・一年後におばあちゃんが、二年後にはおじいちゃんが亡くなりました。地震、放射能によって日常の生活が遮断されてしまった二人の無念を思わずにはおれません。

放射能の恐ろしさもさることながら、心に受けた傷は？・・・次回の「災害地を訪ねる」には、是非とも放射能での被災地、そしてそこに住む人たちの心境を聞ける訪問にさせていただけることをお願いしたいと思います。



「アメニモマケズ」と生徒の描いた壁画（石巻市立大川小学校）



笹川 悦夫氏 作品

# 東日本大震災を風化させない被災地訪問に参加して

高橋 智恵

## 東日本大震災から11年

2011年の3月11日から早いもので11年になります。越後新川まちおこしの会が主催する「東日本大震災を風化させない被災地訪問」に今回、初めて参加させていただきました。出発して間もないバスの中で、今回の旅程を細かく企画してくださった加藤功さんが、「皆さんがあの日どのように過ごしていたか、どこであの日を迎えたかを思い出しながら、振り返ってみてください。」と挨拶されたのがとても印象に残っています。

事前に配られていた葉を見ながら、被災地訪問の日まで、約10年半前の3月11日を思い出していたこともあり、この加藤さんの言葉で、あの日のお出来事をより自分事として捉えることができました。

この被災地訪問は昨年も企画されていましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となり、今年の開催を心待ちにしていました。今年も引き続き感染症の心配があるため対策を十分にとり、19名と盲導犬1頭で、東日本大震災から10年半が過ぎている宮城・岩手の両県を訪問できたことは貴重な経験となりました。

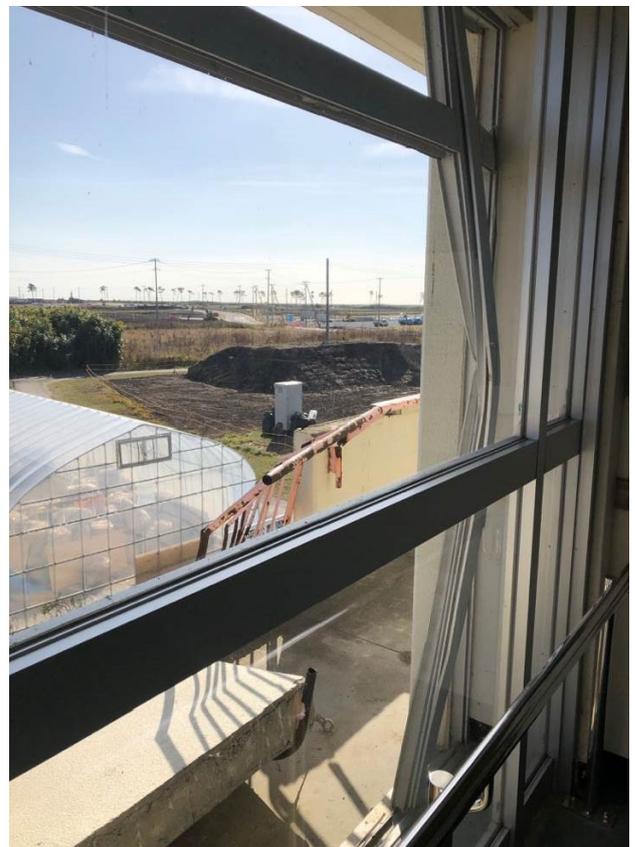


今回の東日本大震災三陸被災地の訪問場所

## 1日目の訪問地

新潟を出発したバスの中では、参加者が自己紹介、今回の訪問に対する思いを共有した後、これまで加藤さんが集めた東日本大震災の記録、津波の映像を見ながらの予習時間となりました。何度見ても真っ黒な津波が押し寄せてくる様子は衝撃的で、目を覆いたくなりました。

最初に訪れたのは、仙台市立荒浜小学校でした。あの日の荒浜小学校には児童や教職員、地域住民等が避難していましたが、2階まで津波が押し寄せたそうです。最終的には屋上からヘリで救出されています。教室内で上映されていたビデオの内容から、地域全体での災害に対する訓練の大切さ、自治体の団結力が地域防災にはとても重要だということを再確認しました。しかし、小学校などの公共の施設が避難所になる大変さについても再度考える必要があると思いました。また、私たち一人一人にとっては日頃の柔軟な対応力や判断力の積み重ねが大事であるということも教えられました。



津波でへし曲げられた2階教室の窓枠（荒浜小学校）

三陸の食文化の豊かさを堪能したお昼の後は、南三陸町の震災復興祈念公園、南三陸町防災庁舎に向かいました。公園からは海を一望することができました。穏やかな海、どこまでも続く青い空・・・本当にここで津波が町をのみ込んだのか、バスの中で見た映像は本当にここで起こったことなのか、と目の前の美しい景色とのギャップが今でも忘れられません。美しい自然も現実、恐ろしい津波も現実。頭でわかっている、震災を経験していない私でも、どう心の折り合いをつけなければいいのかわからなくなってしまいます。



震災復興祈念公園からの太平洋の眺め（南三陸町）

南三陸町の防災庁舎は、震災後の報道でも何度も取り上げられている、有名な場所です。防災無線で最後まで呼びかけた職員の方、防災庁舎屋上に避難したものの津波にのまれて犠牲になった方……。南三陸町の住人にとっては「地震の後は津波」が根付いていたにも関わらず、多くの犠牲者が出てしまったことを教訓にしていかななくてはと感じました。



空とのコントラストが胸に響く（南三陸町防災庁舎）

周りは復興後に整備され、ポツンと当時のまま残されている高野会館をバスから眺め、南三陸町での視察を終えました。その後は三陸自動車道を北上し、陸前高田を目指しました。ガイドの方に同行していただき、復興が進む陸前高田の町を案内いただきました。

山を2つ切り崩してできた新しい団地、海岸付近での新しい防潮堤など、人間が生活を続けていく上では

必要不可欠な復興技術です。自然と共存することの最良の策は、本当にこの方向で間違っていないのだろうか、と考えさせられるお話、現実でした。

また、ガイドさんの話の中で出てきた「どの世代であっても、自分の命は自分で守る」という言葉がとても印象に残りました。私たちも地域で伝えていかなければならないことだなと感じました。

短い時間ではありましたが、1日目の最後は「いわてTSUNAMI（つなみ）メモリアル」を見学しました。

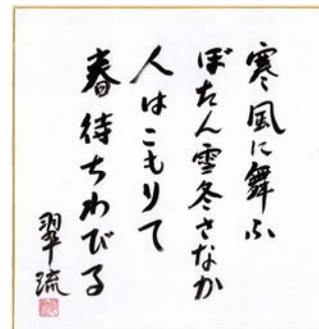
私の弟夫婦が岩手県田野畑村である日の震災を経験しています。当時、3日経っても弟夫婦とは連絡がつかせませんでした。報道で知る情報から、もしかしたら……。と思ったことも蘇りました。

展示されている田野畑村の消防団の車を見て、毎日続いている何気ない日常が突然奪われてしまった被害者の方の気持ちに少し寄り添えたような気がしました。

自分の目で見ること、その場で感じること、そして感じたことを次の行動に移していくこと、気づきをたくさんいただいた1日目となりました。



展示されていた被害にあった消防団の車（いわてTSUNAMIメモリアル）



笹川 悦夫氏 作品

## 2 日目の訪問地

2 日目も朝から天気恵まれ、まず気仙沼市内の震災跡を巡りました。穏やかな朝の海はとても清々しく、やはり巨大な漁船を何百メートルも動かすような津波がここで起こったことを想像することは難しかったです。バスの車内からは震災後に建設された気仙沼大島大橋（NHKの朝ドラにも登場した橋）も見ることができました。



児童や地域住人の命を救った標高 25m の五十鈴神社

気仙沼を後にし、バスで南三陸町へ移動し、旧戸倉小学校に向かいました。戸倉小学校の児童は先生の判断で地震・津波が発生した際の避難を、屋上から小学校より高いところにある五十鈴神社へと地震前日に変更していたばかりでした。おかげで五十鈴神社に避難した児童を含め地域住人 190 人は助かりました。

これは奇跡でしょうか。いいえ、そうではなく、最後に命を守るのは人であり、人の判断が人を救うという参考にすべき事例だと思います。マニュアル通りの防災で本当に大事な人を、何より自分を救えるのか、主体的に考えていくことが求められています。

私は今回の視察で初めて知りましたが、昔から「てんでんこ」という考えがあるそうです。自分で自分の命を「てんでに」守る。とにかくそれぞれ逃げる。家族が集まる場所はあらかじめ決めておけば、必ず家族の居場所は探せる。という津波の際の対処だそうです。

母として、この「てんでんこ」を実践できるか、悩む気持ちもゼロではありません。しかし、大事なのは、子どもたちにも自分で自分の命を守る方法を身につけてもらうこと、最善の判断ができるような強さを教えていくことだと思います。

被害を最小限に防ぐことができた戸倉小学校の近くには戸倉中学校がありましたが、こちらでは海から

だけでなく、山からも津波が来たという証言があり、波が川を遡上し、行き場をなくした波の怖さを実感しました。

生存率がわずか5%の避難所があったことも、私はこれまで知りませんでした。石巻市北上総合支所です。報道でも全くと言っていい程取り上げられていませんでした。57 人の避難者のうち 54 人は亡くなってしまったのです。指定された避難所に逃げてきたにも関わらず、犠牲になっています。この悲しい教訓から地域防災について学ぶべきことはたくさんあると思います。私たちの地域でできること、考えていきたいです。

石巻市で最後に向かったのは大川小学校です。こちらの大川小学校は報道でも取り上げられ、そして遺族の方々の活動もあり、多くの方がご存知の場所かと思います。児童が犠牲になった校庭のすぐ裏には緩やかな山があります。

ここに避難していたら・・・この場を訪れた人は必ずそう思うはずです。避難できる場所があるのに避難しない状況、あってはいけないことだと今なら誰もがわかるでしょう。



参加者の徳山さんの読経で慰霊碑の前で手を合わせる（大川小学校）

2 日間の訪問を通じて、マニュアルや、誰か（責任ある立場にある人）の判断に任せていては命が助からないこと、命を救うのは“人”であり“人の最善の判断”が何よりも大事であることを、それぞれのあの日の出来事から教えていただきました。自分たちの地域で防災に向けてできることを一つ一つ形にしていきたいと強く思いました。

ご一緒いただいた皆様、貴重な 2 日間を有難うございました。東日本大震災を風化させないため、そして復興に少しでも力添えできるよう、またこのような訪問に参加したいと思います。

# 海岸松林を守る

小泉 勇

私が五十嵐浜の松林に関係したのは、今から約 20 年前の 2002 年 2 月でした。町内会の回覧チラシに「海岸松ボラの会」設立記念の案内でした。その記念会に参加し、入会しました。そのころは、会員は、30 名ほどおられたと思います。

4 月から西コスポの裏の松林で作業が始まりました。最初に田村副代表の安全教育を受けました。

- ① 服装：長袖、作業ズボン、ヘルメット（ノイバラ、ニセアカシヤのとげ、ウルシなどにかぶれることを防ぐため）
- ② 刃物の扱い方：特にナタとノコギリ
- ③ その他、気を付けなければならないことに、スズメバチや、チャドクガ（毒蛾）を知りました。

作業は、マツの間の雑草や、マツに絡んだ蔓を切ります。蔓は、全部取るのではなく地上約 50 cm のところで 1 か所切断するのみでした。根元からの養分が断ち切られるので、蔓は、自然に枯れるそうです。

このようなボランティア団体は、西区青山から五十嵐浜まで約 15 団体あり、それぞれの松林で活動しています。

## 新潟マツ林の歴史

新潟市街地の海岸にあるマツ林は、江戸時代後期に初代新潟奉行の川村修就(ながたか)が、飛砂の防止のために造成した歴史があります。砂丘の後ろにグミの木や冬でも葉の落ちないクロマツを植えて、風と砂の被害を少なくすることができました。これが「砂防林」です。

マツノザイセンチュウ



マツノザイセンチュウは、体長1ミリメートルほどの線虫で、マツの樹脂道に入り込み、通水障害を引き起こすことで、マツを枯死させます。

なお、マツノザイセンチュウは北米から侵入した外来の病原体であり、日本のアカマツやクロマツはほとんど抵抗性がないため、全国的な被害となっていました。

出典：佐渡地域振興局 2012.1.5

移動に利用

共生関係

繁殖に利用

天保 14 年 (1843) に川村修就が、海岸の木を切ることを禁止し、6 年間に 3 万本のマツを植え、1851 年には、新潟の海岸全域に砂防林が完成しました。明治時代に、新潟の町の人口が増え、住宅や、学校、病院の用地として、多くの砂防林が切られました。



子供たちも参加のマツの植樹

飛砂の被害が再び大きくなり、新潟市湊小学校では、先生・児童・卒業生がお金をだしあって、500 本のマツの苗を植えました。これがきっかけとなりマツ植え作業は、新潟市内の小学校へ広がり、明治 44 年には、小学生が植えたマツは全部で 1 万本にもなりました。

## マツを枯らす大敵の正体

日本の美しい景色を代表するマツ林や、数百年もの間人々に愛されてきたマツの古木や大木が、夏から秋にかけてあっという間に赤くなって枯れてしまうという原因不明の松枯れが初めて見つかったのは長崎県で明治 38 年(1905)のことでした。

マツノマダラカミキリ



マツノマダラカミキリは、体長18~28ミリメートル程の甲虫類で、衰弱・枯死するマツに産卵します。マツノザイセンチュウは自分で別のマツに移動する能力がないため、マツノマダラカミキリを運び屋(媒介昆虫)として、健全なマツに移動します。

マツノマダラカミキリは、マツノザイセンチュウがマツを枯らすことによって、産卵に適したマツを獲得することができます。

# 編集後記

小泉 勇

この松枯れの広がり方は、非常に速く被害も大きかったことからたくさんの研究者が原因を調べようとしてきましたが、なかなか分かりませんでした。

その後この原因不明の松枯れは、西日本から全国に広がりその量も大きかったので、昭和40年(1965)代になって農林省による研究が始まり、弱った樹や枯れた樹からセンチウ(線虫)という微小な虫が見つかりました。このセンチウは各地でたびたび見つかるので、昭和46年(1971)に元気なマツに植え付けてみたところ、原因不明の松枯れと同じような枯れ方をしたので、このセンチウが松枯れの原因であることが確かめられました。

## マツ材線虫病の防除

「防除」には、秋から春にかけて病気にかかったマツを切り倒し、その中にあるマツノマダラカミキリの幼虫や蛹を殺す「駆除」と、梅雨時から夏にかけて羽化してくる成虫が健全なマツの若枝を食べるとき、マツにマツノザイセンチュウを移すのを防ぐために、薬剤を散布する「予防」と、大きく分けて2つの作業があります。



混交林の試み：タブノキ 新潟市五十嵐一の町

## 植樹転換と抵抗性マツノ利用

その方法の一つとして、樹種転換と抵抗性マツの利用です。私たちのところでは、タブの木を試験的に植え混交林を始めています。

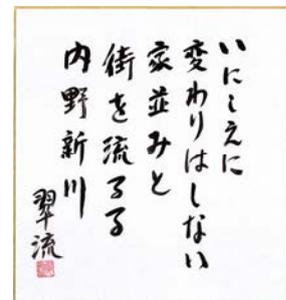
抵抗性マツは、村上の新潟県森林研究所で、選抜中で、今しばらく時間がかかりそうです。一日も早く成功を期待しています。

令和2年度は、新川開削200年にあたり、当会では、記念行事として、前年から計画を練ってまいりました。ところが新型コロナの影響で、三密禁止となり、次々に延期か中止になっていきました。

しかし3年度は、加藤さんの努力により、新川開削は連続講座として姿を変え、かつYouTubeでのライブ配信を採用し復活しました。その時の放送ばかりでなくその後の反響も大きく、現在では、3回の講座の視聴者数は、延べ1,500名に及んでいます。藤沢周様の出演ばかりでなく、新川開削にかかわる興味深い話題満載の講座であることの証明では、無いでしょうか。

音楽祭も、参加者50%としばらくYouTube配信の併用で実施しました。しかし実施の直前まで、出演者が、練習する機会が少なく、練習不足で、腰が引けまた、当会の担当者は、音楽祭の中止か実施か厳しい判断に立たされ、眠れない日々が続いたと聞いています。

今回は、忙しいところ、8編のご寄稿ありがとうございました。加藤功さんには、連続講座と掛け持ちで、編集をしていただきありがとうございました。



笹川 悦夫氏 作品

新川通信-15号 年1回発行  
(現在会員数 96名)

- 発行：越後新川まちおこしの会
- 事務局：新潟市西区内野山手2-18-8-6  
小泉 勇  
電話・FAX 025-261-0235  
E-mail: iikoi@r6.dion.ne.jp

## 入会案内

本会は、新潟市内を流れる西川と新川の立体交差などの近世・近代文化遺産とも言える、新川の歴史およびその流域で育まれた産業や文化について理解を深め、その環境保全につとめながらさまざまな活動を通じて、流域および周辺地域のまちおこしに寄与することを目的に平成19年2月に発足しました。年会費1,000円です。ご入会をお待ちしています。